

『卒後を考える交流集会 I N東京 ～地域で普通に行きたい～』によせて

来る7月9日・10日の両日。文京区にある全水道会館にて標記の集會が開かれます。毎年1回全国を回り持ちで開かれるこの集會は今年で5回目との事。東京で開かれるという事で、実行委員の方々がたこの木を訪ねてくれました。

長年、就学運動を担ってきた人たちがいよいよ自立生活という領域に取り組み始めたと捉え私なりに注目していた集會です。東京で開かれるという事では私もぜひ関わらせていただきたいと思います。

さて、「障害児を普通学校へ・全国連絡会」が誕生して30年。養護学校義務化反対を唱え地域であたりまえに生きる事を願い普通学校へ入学する取組みが長年行われています。しかし、30年という数字は、高校進学も含めれば12年という学校生活を営む子ども達よりもその後の生活を営む青年達の方が多という事になります。

しかし、学校という場を卒業した後多くの人たちが未だ親もとで暮らしています。実行委員の方に、「知るだけで、何人の方が自立生活をしているでしょうか？」と訊ねれば7～8人という数(たぶん身体当事者は数に入っていないでしょうが)。すべてを把握しているわけではないでしょうが、あまりにも少ない数字。多摩ですでに10人を超える人たちが自立生活をしているし、私たちが知る限りにおいても都内だけでも少なくない数の人たちが自立生活を営んでいます。

その違いがどこにあるのか？あたりまえに学校へ通ってきた子ども達とあたりまえに学校へ通う事を求めてきた親たち。学校という場を介しての就学運動の取組みは、学校という場がなくなった後、どのように引き継がれていくのか？

いろいろ話を伺っていて想い描くことは「卒後を考える」のは誰が考えるのか？という点。「自立を考える」と「卒後を考える」というのは同じテーマか否か？「普通に暮らす」というけれどその普通とは何か？「普通学校」という言い方は、「支援学校」があつての表現。障がいを持つ子ども達の周囲にいる人以外は使わない言葉です。

ならば「普通に暮らす」の「普通」は何かと対比しているのか？そもそも対比できるものなのか？と考えていけば、「卒後」という時季的用語がその境目として存在し、私としてはいろいろと考えてみたい事柄が数多くあります。

この集會の実行委員の人たちはもっぱら障がいを持つ子どもの親たちと聞いています。たこの木は設立当初より「親以外の関係」を持って担われてきました。なので、「卒業後」はすぐに次の課題が生まれ、その課題を何とかしなければ、当事者たちは地域から奪われてしまうという状況で活動してきました。なので、もしかしたら私のような者が出張っていったらどうなるのか？どこか所在のない雰囲気も感じなくはないです。でも、一人でも多くの当事者が「卒後」ではなく、「自立」求め新たな展開が始まることを切に願っています。ぜひぜひ、皆さんもお出かけください。

卒後を考える交流集会 I N東京 ～地域で普通に生きたい～

期日：7月9日(土)13時～17時・18時～交流会 10日(日)9時～12時

場所：全水道会館(03-3816-4196) JR水道橋駅東口下車2分他

連絡先：NPO法人「共に結」事務所 090-8596-6764(矢作)